Happy life!!

夏月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｈａｐｐｙ　ｌｉｆｅ！！

【Ｎコード】

Ｎ５５６８Ｈ

【作者名】

夏月

【あらすじ】

高校に入学した近藤明が、その新しくなった環境の中で、周りの人々と織り成す恋愛小説。恋に勉強に、そして部活に悩みつつ、葛藤しながらも前に進もうとする高校生を描いた物語。

第1章　第1話（前書き）

初めての投稿です！温かく見守って下さると幸いです。

第1章　第1話

ぽかぽかとした寝室。この時期、４月ともなれば冬が過ぎ去ったことで、最近は寝心地がいい。

ここにも、気持ち良さそうに寝ている男子が1人。

しかし、もうすぐ起こされることは確実だった。

「明～？そろそろ起きる時間よ～？」

母親から催促がかかる。

そう、この寝ている青年は、近藤明（こんどうあきら）という。大人と子供の中間の、高校一年生という多感な時期だ。　……正確に言うと、入学するのは今日なのだが。

「明！早く起きなさい！」

いつの間にか明の部屋に入っていた、明の母親、近藤由紀子（こんどうゆきこ）によって、掛け布団が剥がされた。

「今日は入学式でしょ！？初日から遅刻なんて許さないからね！？」

「ん～～わかってるよ～。」

防具（掛け布団）を取られた明は、しぶしぶ起きながら呟いた。
「ちゃんと下りてきなさいよ！？」
母親はそう言い残して、１階のリビングに下りていった。

……ん～～、まだねむいんだけどなぁ、母さん怒らすとなぁ、ちょっと面倒だし、しゃーない、起きるか！
なんて思いながら、明は支度を済ませて、１階に下りていくのだった。

リビングに下りていくと、台所で母親が朝食を作っており、机には明の父親、近藤信夫（こんどうのぶお）が先に座っていた。
「おはよう明。……新しい制服なかなかいいじゃないか。守はまだか？」
「おはよう父さん。今日は俺は入学式だから起きたの。」
「起きたんじゃなくて、起こされたんでしょ！」
早速母親に突っ込まれた。まったく、朝からうるさいなぁ…
「明、何か言った！？」

「何でもないです！！」

ちなみに、守（まもる）というのは明の弟で、2歳離れている。つまり、新中2で、世間では生意気になってくる時期だ。もっとも、守は別だが……。

「行ってきまーす。」

と、挨拶しながら明は家を出た。最寄り駅までは自転車を使い、そこから3駅離れた駅で降りる。

たらたらと走る各停の電車に揺られながら、明はこれから日常になるであろう電車に対して、物思いにふけった。

「明！おーはよ！」

と、駅を出て学校へ歩いてる途中に、後ろから声をかけられた。振り向くと、小走りで駆け寄ってくる女の子がいた。

彼女の名前は、松井美咲（まついみさき）という。明と同じ高校一年生であり、さっぱりした性格で、髪はかかるかどうかぐらいのショートだ。なかなか可愛いのだが、明は大和撫子っぽい人が好きなので、美咲に恋心を抱いたことはない。

「おっす、美咲。寝癖ついてんぞ。」

「えっ、ほんと！？今日寝坊しそうだったからさー急いでたんだよねー」　あははと苦笑いしたがら、髪を直す美咲。

まったく、こいつはいつもこうだ。もっと女の子らしくすりゃい

いのに…。

「何？人の顔じろじろ見ちゃって。あ、それとも新しい制服の私に見とれちゃった？」

「まだ寝ぼけてんの？ったく、遅刻するよ。」

と、明が先に歩き出した。

「ちょっと！？も～、待ってよ～」

ちなみに、明と美咲が出会ったのは小学校のころで、ちょっとしたことがあって二人は仲良くなった。言わば腐れ縁ってやつだ。

二人は揃って校門を抜けると、先生の指示通りにクラス分けの書かれた紙を見てから体育館に行くことにした。

クラス分けの紙の前には大勢の生徒がおり、あちこちから喜ぶ声や悲しむ声が聞こえる。まるで受験の合格発表みたいだ。

明と美咲は生徒の間をすり抜けるようにして、紙の前に着いた。

「えっーと、近藤明…近藤明……あ、あった。２組か～。」

「あれっ？私の名前がない～！？」

と、美咲が騒いだ。明は、はあっと溜め息をつくと、美咲に言う。

「ほら、ここにあるじゃん。俺と同じ２組。ちゃんと探せっつーの。」

「あ！ほんとだー。明と一緒じゃん！ねぇ、嬉しい？」

「んーどうかなー。」

「ひどーい！？嬉しくないの！？ねぇ！」

「冗談冗談。まことに光栄でございます。」

「それでよろしい。」

その後、明は美咲と一緒に体育館へ行き、入学式が始まった。

…どーもこうゆう堅苦しいものが苦手なんだよな～。校長先生の話って長い上につまらないだけだし。ほら、他の教員も欠伸してるじゃーん…

などと考えながら、明がうつらうつらしてると、後ろから頭をぺちんと叩かれた。

「何だよ美咲。」

「もう校長先生の話終わったわよ。次は生徒会長の話。先輩の話なんだから少しぐらい聞いてなさい。」

と、囁くように美咲が言ってきた。

前を見ると、確かに1人の女子生徒が壇上に登っているところだった。

…とても綺麗な人だ…

そして、その生徒会長が静かに話し始めた。

「初めまして、新入生の皆さん。私は、生徒会長の、桐島静香（きりしましずか）です。この風華学園（ふうかがくえん）に、また新しい仲間が入ったことをとても嬉しく思います。この学校には、文化祭や体育祭、学年旅行など、様々なイベントがあります。皆さんには、そのようなイベントを通じて、青春を謳歌し、学校生活を有意義なものに出来ることを約束します。
　私達生徒会は、生徒のみで構成された機関です。皆さんの学校生活がより良いものとなるよう、尽力していきます。生徒会には、どんな生徒でも入ることが出来ます。新しい生徒会員をお待ちしております。以上です。」

　ぱらぱらという拍手に見送られながら、先生会長である桐島静香は壇上から下りていった。

「すっげー綺麗だったな。」

「……う、うん。そうだね…。」

　何か、美咲は煮え切らない顔をしていた。

「これにて入学式を終わります。それでは新入生の皆さん、下校して下さい。」　入学式が終わり、教頭先生から指示が下る。

「それじゃ美咲、一緒に帰るか。家も近いし。」

「は～い！！」

「何だよ？やけにテンション高いな～。」

「だってだって～、中学の時は一緒に帰るとかなかったじゃーん？」
「そうか～？まぁ別に一緒に帰りたいなんて思うわけないからなー、って痛い痛い！背中を叩くなよ！嘘だって！」

明と美咲が体育館を出て、校門近くまで他の新入生に流されるように歩いていくと、そこには満開の桜が両脇に道に沿って咲いていた。先程登校してきた時は、緊張していたのと急いでいたのでほとんど気が付かなかった。様々な種類の桜が植えられていて、とても綺麗だ。

「うわっ、綺麗～！！ねぇ、明もそう思うでしょ？」
「確かに綺麗だな～。」
二人は桜に見とれながら立っていた。

満開の桜の下で明は思った。

新しい生活が始まる。

第2話

校門を出た二人は、他愛もない話をしながら駅までゆっくりと歩いて行った。

「あっ、そういえば、今日明の家に行ってもいい？」

思い出した様に、美咲が言ってきた。

「別にいいけど……何で？」

「だって忙しくなる前に、また葵さんに会っておきたいしー、入学式の日にそのまま帰るのも寂しいじゃん？」

ちなみに、葵（あおい）というのは明の姉で、明の二歳年上で今高校三年生だ。なぜか美咲は異様なほどに葵になついており、葵目当てでよく家に来るのだ。

「そうか～？にしても、突然過ぎだろ。連絡くらい寄越せっつーの。」

「いいじゃんいいじゃん。それに明なら許してくれるって、思ってたし。」

そんなことを笑顔で言われたら、怒る気にもなれないじゃーん…

「しょうがねぇ～な～」

「さっすが～！！明は話が分かる～！」
「ったく、調子がいい奴だな～。」
苦笑いしながら、許してしまう明だった。

「ただいま～」
「おじゃましまーす。」
二人は入学式の格好のまま、明の家にやって来た。
「おかえりー。あら、美咲ちゃんいらっしゃい。」
「あ、こんにちは由起子さん！！遊びに来ました。」
「ゆっくりしていってね。あ、でも葵なら今日は午後にならないと帰って来ないって言ってたわ…。」
「あ…そうなんですか…。」
「じゃあお昼でも食べながら待つことにしたら？」
「はい！！そうします！わざわざありがとうございます！」
「いいのよ気にしないで。美咲ちゃんならいつでも歓迎だわ。……

じゃあお昼まで多少時間があるから、明の部屋で時間を潰してて。」

美咲と母さんの会話を聞きながら、明は蚊帳の外にいる思いだった。……まぁ、美咲が来る時は、しばしばこのように取り残されるので、今じゃほとんど馴れたが。

明と美咲は明の部屋がある2階に上がった。2階には明の部屋だけでなく、守や葵、さらに両親の部屋がある。言わば2階には個人のプライベートな空間が存在するのだ。

二人が二階の廊下に着くと、守がちょうど部屋から出てきたところだった。

「お帰り～兄ちゃん。あれ？美咲姉ちゃんも一緒？」

「そうよ～。明がどうしても一緒にいたいって言うからさ～。」

ポカッッ！！

「いったーい！！何も叩くことないじゃん！！」

「お前がしょーもない嘘をつくからだろっ。」

「二人とも、相変わらず仲いいね～。」

「ったく。家に来させなきゃよかった。」

と、明は再びため息をついた。

「あ、そーいえば兄ちゃん。あとで時間ある？わかんない英語の問題、あるんだけど……」

「ん？別にいーよ。」

「ありがとー。んじゃまた後でね～。」

と言い残して、守は自分の部屋へ戻って言った。

「明に教えられるの～？明って別に頭良くなかったよね～？」

「うっさいわ。ともかく、そんなこと美咲に言われたくないわ。」

「なによー。別に私の方が明より頭いいはず……。」

「ほー。じゃあ中３の最後のテストの点数と順位を言ってみ？」

「うっ……。…１４３点で、１７２番…」

ちなみに、そのテストは学校で行われたもので、英数国の３教科だ。ゆえに、３００点満点で、受けた人数はだいたい２００人である。

これを聞いた明は……驚いていた。

「な、なによ！？」

「……美咲ってバカなんだな…。俺一応１００位以内なんだが…。」

ニヤニヤしながら、明は言った。

「う、うるさーい！じゃあ、次のテストで勝負しなさい！」

……いや、結果見えてるだろ…

「別にいいけど、何を賭ける？」

美咲は少しの間思案すると、いいことを思いついたかのように顔を輝かせながら、言ってきた。

「負けたほうが、勝ったほうに食堂のご飯を奢るってどう？？」

「その勝負、乗った！」

これで昼食代が一回分減った！早くテスト来ね～かな～、などと考えている明であった。

第2話（後書き）

ちょっと変なところで区切ってしまいました。
なるべく早く更新したいと思います。

第3話

明の部屋に入った二人は、明は勉強机の椅子に、美咲はベッドに腰かけ、くだらない話をしていた。幼馴染みということで、話題が尽きることはなかった。

「――でさー、うちの母さんったら――で、――――だったんだよー？」

「へー、じゃあ――――だったとか？」

「そうそう！で、――――とか言ってー、――――してんだよ！？信じられる！？」

……まぁ、もっぱら話してるのは美咲で、明はどちらかというと聞き役だった。これは昔からずっと変わらないポジションだった。

二人がしばらく話していると、一階から由起子の声が聞こえた。

「明～！ご飯よ～！」

「わかった～！……じゃあ美咲、下に行くか。」

「うん！」

「うわぁ〜〜！！おいしそー！！」

食卓に並んだ昼食の料理を見て、感嘆の声をあげる美咲。それもそのはず、机に晩御飯かと思えるくらいの豪華な料理が並べられていた。

…うちの母さんってこうゆうところあるんだよなぁ。普段の昼食なんて前日の夕飯の残りのくせに…

そんなふうに明は思っていると、由起子が明に鋭い視線を送ってきた。……その目は、“何も喋るな”と語っていた。

苦笑いしかできない明だった。

明と美咲と由起子と守の四人で昼食を食べていると、不意にインターホンが鳴った。

「あ、葵だわ！」

由起子はそう言うと、いそいそと玄関へと向かう。

明は何となく美咲の顔を見ると、その顔は緩んでいた。まるでエサを待つ犬のようだ。

全く、葵のどこがいいんだろ……

口を開けば憎まれ口ばかり……

その上、人を小馬鹿にしたような態度しやがって……

そんな葵の本性を、小一時間くらいかけて、美咲に説明してやりたい…

そんなくだらない事を明が思っているうちに、葵はリビングに来ていた。

「ただいまーー!……。!!!あっーー!美咲ちゃんじゃーん!!おっひさー!」

テンションの移り変わり激しいな、おい。

「葵さーん!!おっひさー、です!!もう、帰って来るの遅いですよ〜!!」

お前もかい。

「ごめんねー、ちょっと用事があって……。うわっっ!!!!何、このご飯!?」

いや、そこは突っ込んだらダメだって。

葵がそう言った瞬間、いつの間にか由起子が葵の後ろに立っていた。美咲の位置からは見えないところ、つまり葵の背中に由起子の左手が隠れていた。

「何かしら?お昼ご飯が何か変?」

「！！！！」

葵は、由起子の急な出現と、普段ならしないような猫なで声に驚く。そのあと、葵の背中あたりに痛みが走る。恐る恐るチラ見すると、由起子の手が葵の背中をつねっていた……。

……けっこう痛い……

一刻も早く、背中の痛みから逃げるために、葵はすぐさま言った。

「なんでもナイです…」

明と守は苦笑いをしており、美咲は何が何だか分からない顔をしていた。葵は背中をさすっていた。

母さんは……笑っていた…

……恐いです。

第４話

昼食を食べ終えた明は、自分の部屋で本を読んでいた。美咲は葵の部屋へ、二人で引っ込んでしまったからだ。

一時間ちょっと読書していた後、本を読み終わったので本を横に置いて、ごろりとベッドに寝転んだ。

…明日の学校の準備でもするか…

そんなことを思い、自分の鞄に手を伸ばした時、部屋のドアがノックされた。

「兄ちゃん～ちょっといい～？」

「守かー？入って来いよー。」

ドアが開く音がした後、守が入って来る。手には本とペンが握られていた。

「あのさ…さっき言った英語の問題なんだけど……今聞いていいかな？」

わ、忘れてた…。

「お、おう。いいよ。」

そう言って守の手元を見ると、本だと思っていた物は問題集だった。

「……どうせだったら、守の部屋でやろうぜ？勉強してる途中だったんだろ？」

「あ、うん！ありがと！」

そう言いながら、満面の笑顔を向けてくる守。

……かわいい…！

…いやいや、自分の弟を変な目で見てる訳じゃないですよ？…ただ、こう、子犬がすりよってくる様な、何とも言えない愛くるしさがあるんですよ…。

そんなふうに考えながら、ぼうっと守の顔を眺めている明。
確かに守は可愛いが、それは仕草などだけではなく、顔立ちが整っているからでもある。女装すれば、普通に女性と思ってしまうくらいなのだ。
その分、体つきは華奢で、筋肉もほとんどついてない。身長も約１５０ｃｍと小柄で、部活もチェス部に入っている。
だが、男っぽさとか荒々しさがないのに、守はよくモテる。本当にモテる。中学に入ってから一年間で５人には告白されたらしい。
趣味のチェスも強く県大会に進むほどであり、それも女子にとっては長所らしい。女子に言わせれば、普段の守の優しい顔と、チェスしてる守の真剣な顔のギャップがいい、とかなんとか。まったくもって、羨ましい限りである。

「兄ちゃん～？どしたの？僕の部屋に行くんでしょ？」

座ったまま動こうとしない明を、不思議そうに見ている。

「…あ、そうだな。ごめん、ちょっと考え事してた。」
そう言うと、明と守は、守の部屋に移動していった。

「ここが――なるから、こっちが――――なって、で、答えは――になるってこと。」

「……あ、そうか。なるほど。」

守の部屋に移動してから小一時間、明は守の勉強を見ていた。だが、さすがに小一時間ずっと教えていた訳じゃない。明は守の部屋で雑誌読んだり守のノート見たりして、のんびり過ごしていて、守は勉強してて分からない所があれば明を呼ぶ、っていう形で勉強していた。

ふと思いついた様に、明は言った。

「なあ守？それって学校の宿題？春休みは今日で終わりだろ？」

「ん？いや塾の宿題だよ。それに学年とクラスが変わるから、春休みは宿題がないんだ。」

ああそれもそうか、と納得して、手に持っていた雑誌に目を向けた時、廊下で明を呼ぶ声がした。

「明～？どこにいんの～？」
葵の声だった。
明は、守の部屋から顔を出しながら答えた。

「姉ちゃん何？そんなでけー声出さなくても聞こえるつーの。」
「何だ守の部屋か。……なんか、もう美咲ちゃんが帰るらしいから、あんた送ってってやんな。」
「……まだ3時じゃん。別に外暗くないんだから、わざわざ送る必要ないだろ。しかも家もそんな遠くないし。」
「いいから送ってきなさい！！レディに対する礼儀でしょ！？」

うぇーー。めんどくさー。
どーにかして、逃げれないかなー。

「い、いや、でも、俺今、守の勉強見てるしさ、手が離せそうにないなーって……。」
「兄ちゃ～ん？僕、ちょうど今、宿題終わったから、もう大丈夫だよ～？」

ぬぅ、守め。タイミングいいんだか悪いんだか。

「お、俺も宿題やらなきゃいけないから……。」
「入学式に宿題出る訳ないでしょ！」

くそう、結構手強いな。

と、そこへ、母さんが2階に上がって来た。

「あら。廊下で何してるの？」

「ねぇ母さん。明が美咲ちゃんを送らないって言ってるんだけど～？」

姉ちゃんが勝ち誇った顔で、こっちを見ていた。……ダメだ。母さんを使われたら、勝ち目がない…。

葵の言葉を聞いた母さんは、微笑みながら明に言ってきた。

「…明？送ってきなさい？」

「ハイっ！」

潔い返事を残して、明は自分の部屋へと退散した。

5分後、外に出る準備ができた明は、1階のリビングに降りていった。そこにはすでに帰る支度をした美咲がいた。

「おまたせ美咲。」

「じゃあ行こっか。」

そうして二人は家を出て、美咲の家へ向かう。

向かう途中、明はふと、美咲に問いかけた。

「……なぁ美咲…。今日は帰るの早くないか？もっと葵と話さなくていいのか？」

そう、いつも美咲が葵に会いに来る時は少なくとも2時間は話していて、多い時は4～5時間話していることもある。弟が二人いる葵にとって、妹みたいな美咲は貴重な存在なのだ。

「……うん。……葵さんももう受験生だしさ、あんまり付きまとうのも、邪魔だろうし……。」

そう言って、美咲は寂しそうに微笑んだ。

「……そうか？葵のやつ、お前が来るのいつも楽しみにしてるぞ？」

「……ありがと。」

やはり、美咲の顔は寂しげだった――――。

いつの間にか、二人は美咲の家に着いていた。

「送ってくれてありがと！！」

いつもの笑顔で美咲が言う。まぁ、葵に少し会えないからってへこたれる美咲ではないだろう。

「ん。いいって。気にすんな。どーせいつもの事だし。」

「えへへっ！ドンマイっ、アッシー君っ！」

今どきアッシー君って……。しかも、車じゃないんだから、少し違くね？

内心でそんなことを思いつつ、スルーしながら明は口を開く。

「あ！あの勝負、忘れるなよ？」

「？？あの勝負って？」

「ほら、昼飯を賭けた試験の話。……まぁ結果は見えてるけど。」

「う、うるさいっ！ぜ～ったいっ、勝ってやるんだから！！」

けらけら笑いながら、明は言った。

「まぁ頑張ってねー。じゃあまた明日。」

「もー……。じゃあね。ばいば～い！！」

そう言って、二人は別れた。

第４話（後書き）

少し書き方変えました。

それより、まだまだ登場人物少ない…ってことで、次話から学校の話になります。

応援よろしくお願いします。

第5話（前書き）

非常に遅れてしまいました。すいません。

ただ、インフルとか運動会とかあったので、多目に見てくれると嬉しいです。

第5話

翌朝。
始業式の日。
今日は春休みも終わるということで、近藤家は久しぶりに活気があった。
「じゃ、いってきまーす。」
と、明は出ていった。

学校の近くまで来ると、明は後ろから声をかけられた。
「よう、明！！」
明が振り向くと、同じ制服に身を包んだ、1人の男子生徒がいた。
「おー。おはよ、雅人」
その男子の名前は、上野雅人（うえのまさと）。中学の時からの明の友達だ。明と同じように、真新しい制服に身を包んでいる。
「いやー、たった何週間か会わなかったのに、懐かしく感じるなー。俺は寂しかったぞー。」

ちなみに、彼は相当お調子者だ。何かと不真面目な事を言い、周りを盛り上げるタイプなのだが、そのため女子から安全パイと思われてるのだ。顔も別に普通だから、結構可哀想な奴だ……。

「なあなあ、明は何組だった??え?2組?あーあ、俺は3組だったから違うクラスかー…。まぁいいや。あとやっぱり、担任は美人がいいな!!なぁ、明もそう思うだろ!?」

「別に担任なんか、どーでもいいだろ。」

「かぁ〜〜〜〜っ!ダメダメ!明は分かってない!担任は美人ってだけで、学校に行きたいって気持ちになれるだろっ!?あと、そうだな〜、大事なのは、誰と同じクラスになれるかってことだな〜。」

確かに、と明は思った。
これは、大人にとってはどーでもよく見えることだが、生徒にとっては生死を分けるほど大事なのだ。

「まーな。クラスメート次第で一年が楽しいかつまんないか、決まるくらいだからなー。」

「だよな!!まぁ、男子は多分溶け込めるからいいとして、問題は女子だ女子!!可愛い子がいるかどうか、そしていかに可愛い子と仲良くなれるか、その一点にかかっていると言っても過言ではない!!!」

「おいっ、バカっ!声がでかいって!」

はっ、と雅人が辺りを見回すと、ほとんどの人が二人のことを見ていた。まだ学校に向かってる最中なので、同じ高校の生徒だけでなく、一般の社会人とかからも見られており、人によってはこそこそ喋ってたりする。彼らの目は一様に、変な人がいる、と表現していた。

…萎え。

初日からこれかよ…。

それから、明と雅人は二人して、黙って足早に学校へ向かったのだった。

「んじゃ、俺は3組だから、こっち行くわ。あ、可愛い子いたら紹介よろしく！」

始業式が行われる体育館に着くと、雅人はそう言って去っていった。

それを見送ったあと、明も自分のクラスである2組が集まっているところへ向かった。

まだ開始時刻には多少時間があったので、明は周りを見て、知り合いがいないか探した。

うーむ、あまりいないな…。

そうしているうちに、美咲が歩いて来るのが見えた。

「おはよう、明。私より先に来てるって、珍しいじゃん。」

「うっせー。俺はそんなに遅刻したことねーから。」

「それにしてもー、知ってる人少ないよね？二人くらいしかいなかったし。」

「俺も思った。知り合いはまだ雅人しか見てねーし。」

「雅人？？？」

「上野だよ。上野雅人。中学で一緒だったろ？」

「あぁ～、上野君かぁ～。最近会ってなかったなー。」

「まー、知り合い少なくても、みんなこんなもんだろ？中学と違って受験があるし。」

「そうだよねー。

……あ～～、友達できるか不安になってきた～～……。」

「大丈夫だって。いつものように猫被っとけば平気だろ～？」

「だれが猫を被ってるって！？」

まぁ、美咲なら心配するのは杞憂ってもんだ。あいつは明るいから誰からでも好かれる奴だし。

そして、開始時刻まで１０分を切った頃だった――

誰かが明の隣に座った。

その時は、何かを意識したわけじゃない。

ただ、無意識のうちに俺は顔を上げていた。

そして、俺の隣に座った女子生徒を見る。

と同時に、

目が離せなかった…。

人の感情は、コントロールすることなどできない。

……ましてや、人に恋する気持ちなんて。

……一目惚れだった。

第5話（後書き）

いやー、携帯での投稿は時間がかかりますねー。

……ＰＣにすべきだった（涙）

第6話

隣に座った女の子。

名前は何だろう、とか

同じクラスで嬉しい、とか

そんなことすら思い浮かばなかった。ただ、純粋に見とれてしまった。

「???どしたの?」

急に黙り込んで横を向いている明を、不思議に思って声をかける美咲。

そして、明の視線の先を見ると、驚きの声をあげた。

「あーーーっ!!!!!

もしかして、由美!!??由美だよね?」

え゛?知ってんの?

その由美と呼ばれた人は、美咲の方を向くと、同じように驚いている。

「あ、松井さん？久しぶりだね。同じ学校だったんだ。」
と言って、笑顔になる。明はこの状況に、心の中でひどく混乱していた。
「ねーー！！私も学校が同じになるなんて知らなかったよ～～。しかもクラスまで一緒だし！」
「お、おい…。美咲？
えっと、誰…？」
「あ、そっか～！明は知らないよね～。彼女は白井由美（しらいゆみ）さん。私が行ってた塾で同じクラスだったの～。
あ、でー由美、こっちの冴えない男がー、私の幼馴染みで近藤明っていうの。」
「うるせ。冴えないは余計だ。」
「どうも、白井由美です。よろしくね、近藤君。」
「あ、い、いや、こちらこそ、よろしく…。」
そう言って、明は再び由美を眺めた。
やはり可愛い。いや、彼女の場合、綺麗の方がしっくりくるかな？髪は黒でロング。制服から伸びている手足はとても白く、白い服とか似合いそうだ。
身長は目測だけど１６０前後だな。話し方とかも落ち着いていて、穏やかな人であることが一目で分かるよ。ほんとに俺のストライクゾーンど真ん中じゃん！

そんなことを明が考えていると、不意に由美と目があった。

やばっ！

緊張してしまって、明はすぐに目を反らし、前を向いた。

そんな行動をすれば、明が由美に好意を持っているようにしか見えないが、幸いにも、壇上に司会の先生が登り始めたので、ばれずにすんだ。まわりの生徒たちも、徐々にその先生に気付いて、静かになっていく。美咲と由美も同じく、前を向いて、先生の姿に集中する。

その先生が壇上の端にあるマイクの場所に辿り着くと、既に生徒たちはほとんど静まっていた。

「えー静粛に。これから、始業式を始めたいとおもいます。まずは、校長先生のお話です。」

そう言うと端の方から、昨日も見た校長先生が出てきて、真ん中に着くと話し始めた。

「えー生徒諸君。お久しぶりです。今年も無事に、君たちが進級――――――――――――――――――――――――――――――――」

始まった校長先生の話をいつもは真面目になど聞くことない明だが、今日は珍しく校長先生を真っ直ぐ見ていた。隣にいる由美に、幻滅されたくなかったからだ。

……緊張していて、校長先生の話は右から左へと流れていったが。

「――――――――――ということです。以上で終わります。」

そのあと、新任の先生の紹介や、生徒会からのお知らせがあり、そして始業式は終わった。

……ほとんど聞いてなかった……

第7話（前書き）

期末テスト真っ只中です。

第7話

始業式が終わったあと、明たちは自分たちの教室、2組へと移動した。

「席は黒板に書いてある通りに座ってくれよ～。」

教室へ行くと、担任と思われる男の人が、教壇から指示を出していた。

席順はどうやら出席番号らしい。ただし、男子と女子の列は交互で、全部で6列ある。

えーと、俺の席は……と明が黒板を見ると、一番廊下側の、一番後ろの席だった。

まぁまぁだな。ていうか、廊下側の一列が男子の列なら、窓際に座れるのか……？

なんて考えながら、自分の席に向かった。席に座った時、横から急に声をかけられた。

「あ、近藤君って席そこなんだ。よろしくね。」

！！！！！

うおっっほーい！

横の席に白井さんがおるよ！

「あ、ああ。よろしく。」
やばい！顔見ただけで緊張する！
どこまで純情なんだ俺！

「え～では、皆座ったことだし、とりあえず俺の自己紹介から始めようか。
俺の名前は、有川洋一（ありかわよういち）っていいます。この高1－2を、一年間担当することになりました。」

教壇に立っている男性教師が話し始めた。まだ年は若そうだ。身長はわりと高くて、着ているスーツが似合っている。

「年齢は31歳。ここで教師をやるのは今年で4年目だな。
俺が教えるのは数学。俺が担任なんだから、お前ら数学だけは赤点取んなよ～？
…っとまぁ、自己紹介はこんなもんでいっか。なんか俺に質問あるやついるか？ちなみに、「彼女いますか？」って質問はなしだかんな？」

そう言って、有川先生は教室をぐるりと見回した。まだみんな多少緊張してるせいか、誰も手をあげない。

「……誰もいないのか？じゃあ、「彼女いますか？」って質問もしていいぞ？」

「彼女いますか？」
教室のどこかから、誰かが先生に質問した。そのおかげか、教室の雰囲気が少し和らいだ気がした。
「あ？彼女？それがいるんだよ～～。も～凄く可愛いんだよ～♪ほら、特別に写真見せてやるよ～。」
ほらほら、と彼女とのツーショット写真を見せびらかして、生徒たちの笑いを誘った。
結局自慢かいっ

「明～」
今は放課後。と言っても、始業式だったので、時刻はお昼前だ。
結局、あのあとは普通に出席をとって、学級委員を選んだ。学級委員には、いかにも真面目です、って感じの、メガネをかけた男女が選ばれた。
「明ってば～～。早く帰ろ～。」
美咲が近くによってきて、明に向かって話しかけてくる。
「ん、おぉ。帰るか。」

「あ、ちょっと待って。
由美〜〜？一緒に帰ろ〜〜？」

「あ、うん。帰ろっか。」

と答え、笑顔になる由美。その瞬間、明の背筋が、“ぴんっ”と音が鳴ったかのように伸びる。一緒に帰ることなんか、予想すらしてなかったのだ。たとえ、美咲がいたとしてもだ。

3人は喋りながら、校門を出た。美咲がお喋りなので、話は弾む。
「ねぇねぇ、由美ってどこに住んでたっけ？？うちらと同じ中学じゃないから、久住公園じゃないよね〜？」
久住公園（くずみこうえん）っていうのは、明や美咲の最寄り駅で、雅人もそうだ。久住公園駅は、久住市のほぼ中心に位置している。ちなみに、学校は久住市ではなく、隣の風宮（かざみや）市にある。

「私の最寄り駅は東久住駅だよ。家自体は、久住公園寄りにあるから、多分家は近いんじゃない？」

「へぇー東久住か〜！案外近くにいたんだね〜！全然分かんなかった〜。」

ちなみに、東久住駅は、久住公園駅の隣駅であり、学校から2つ目の駅だ。

「じゃあさ〜、今度明ん家来なよ〜。2歳上のお姉さんがいてね、

お洒落ですっごい面白いんだよ～！」

「へぇ～。そうなの、近藤君？」

「え？まぁ、いるにはいるけど・・・面白いかなぁ？？」

「明は葵さんの良いところを全然分かってない！！」

「俺の方が一緒に過ごしてる時間多いんですけど・・・」

横を見ると由美が苦笑していた。

「そういえばさぁ～、由美って何部に入るか決まってる？」

思い出した様に美咲が言った。確かに、気になる。美咲よ、よくぞ聞いた。

「ん～～、それが決まってないんだよね～。中学の時は生徒会に入ってたし。

そういう松井さんは？何部に入るか決めた？」

「もっちろん！！私はテニス部に入るんだ～！決まってないんだったら、由美、テニス部に入ろーよー。」

「やめとく。私、運動は全然ダメなんだ～。入るとしたら、多分どこかのマネージャーかなぁ。」

「そっか～～！！ざーんねん！」

「近藤君は？」

「俺？俺はバドミントン部のつもり。中学でもやってたから。」
「でも、明っていつまでも下手なまんまなんだよねー・・・。」
「うるさい。俺は楽しく出来ればいいの！」
「またそんな言い訳ー。」
しばらく黙って俺と美咲の会話を聞いていた由美が、はっきりと言った。
「じゃあ、私、バドミントン部のマネージャーでもやろっかな。」
！！！
「えっと、ほんとに？」
恐る恐る尋ねてみる。
「え！？ダメだった！？」
「い、いや、別に。入ってくれたら、助かるなー……。」
「何で何で？何でバドミントン部なの？？」
横から、美咲が由美にしつこく聞いている。
せっかく俺が話してたのに……
「別に何部でもよかったから、知り合いがいるほうが良いかなー…

…と思ったんだけど……。」

なんか、美咲が納得のいかない顔していた。

だが、俺にとっては嬉しいことこの上ない！

その日の帰り道、上機嫌で家に帰った。

第7話（後書き）

何か今回は説明っぽくなってしまいました。

投稿するのに日数がかかるかもしれませんが、途中で止めることは考えていませんので、多目に見ていただけると幸いです。

毎日更新してる人ってすごいですね…

第8話（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

第8話

翌日。

今日は、始業式の次の日、つまり学校が始まってから2日目にもかかわらず、授業は1時間目から6時間目まであった。
とは言っても、どの教科も先生の自己紹介や1年間の予定、授業形式などの説明など、ガイダンス的な感じではあった。

だが、3時間目の数学の時間は、そうもいかなかった。数学の先生は、明のクラスの担任なのだ。

授業のガイダンスもそこそこに、担任であり数学の先生である、有川先生が切り出した。

「え〜〜、先生としては、まだ君達の学力が分からないので、これから小テストをしたいと思います。」

そう言うと、有川先生は、にやりと笑った。

もちろん、明は慌てた。受験が終わってから、特に何もしていなかったからだ。周囲の人も、一部の人を除いて、慌てている。どこかから、「えーー」とか、「最悪〜〜」とか言う声も聞こえた。

明がふと横を見ると、落ち着いた姿の由美がいた。おそらく、休みの間も勉強はしていたのだろう。多分、美咲は心の中で、かなり動揺しているに違いない。

由美の横顔を見ていたので、それに気がついた由美は、不思議そうに尋ねた。

「どうしたの？何か顔についてる？」

「あ、いや…その……、よ、余裕そうだなぁ…と。」

「え～そんなことないよ～。休みの間、そんなに勉強しなかったから。」

あ、やっぱり、多少は勉強してたんですね…。

しょぼーん。

明が由美と話しているうちに、前からテストの用紙が配られてきた。2枚である。

鞄から筆箱を出そうとしていると、前の席の男子が、ためらいがちに明に声をかけてきた。

「ねぇ、あの、シャーペン貸してくれる？俺、筆箱忘れちゃったみたいで…。」

「ん、あぁいいよ。」

明が、はい、とシャーペンと消しゴムを手渡すと、ありがとう、とその子は言って、前を向いた。教壇では、有川先生が、全員に用紙が行き渡ったことを、確認していた。

「いいかー。そろそろ始めるぞー。時間はチャイムがなるまでだ。それでは、よーい、始めっ！！」

キーンコーンカーンコーン……

「終了っ！はい、みんなペン置いて～。
じゃあ、後ろの人から、紙を前に回して。」

明は言われた通り、前に回した。有川先生は、各列の用紙を集め終わると、挨拶をして教室を後にした。

「あぁーー」

「大丈夫、近藤君？」

悲痛な声を出している明を見て、心配そうに由美が言った。

「……全然ダメ…。……白井さんは？」

「え？私は…、うーん、まぁ悪くはないと思う…。」

多分、相当良いのだろう…。ただ、元気のない明を見て、出来た、なんて言えないに違いない……。
そう考えた明は、はぁー、と大きく溜め息をついた。

「まぁまぁ、そんなに落ち込まないで。別に定期テストじゃないし…。」

「それはそうなんだけどね……。」

とそこへ、明の前の席の男子が、話しかけてきた。

「あ、これ。ありがとう。」

そう言って、明のシャーペンと消しゴムを渡してきた。

「ん？あぁ。」

「あ、俺、北川っていうんだ。北川真平。よろしく。」

「俺は近藤明。こっちこそよろしく。」

「あ、私、白井由美です。よろしくね。」

「それよりさ、北川、今のテストどうだった？」

「え？今のテスト？結構簡単じゃなかった？」

それを聞いた明は、ガクッと肩を落とした。

そんな明を見て、由美が、クスクスと笑った。

「あ、あれ？もしかして、ダメ……だった？」

「う、うるさいっ。それ以上言うなっ、北川っ。」

そう言うと、明は机に突っ伏した。真平と由美は顔を合わせると、苦笑いをして、由美は肩をすくめた。

真平がにやにやして続ける。

「あれれ～？今のテスト随分と簡単だった気がするんだけどなぁ～？もしかして、勘違いかなぁ？」

そう言われた明は、すぐに顔を上げて、にやりと笑って言った。

「でもまあー、授業初日に筆箱忘れるより良いよねー。」

由美はまたしても、クスクスと笑った。

真平は、恥ずかしさで顔が真っ赤だった。

安心した。

なんとかうまくやっていけそうだ。

知り合いが少なかった明は、心からそう思った。

第8話（後書き）

今年も頑張って続けていきますので、どうか応援よろしくお願いします。

第9話

「なあ真平。何部に入るか決めた？」

昼休み。
弁当を食べながら、明は真平と話していた。美咲と由美も一緒に食べている。

「うーん…、一応中学で軟式テニスをやってたから、硬式かバドミントンとか考えてるんだけど……。明は？」

二人は名前で呼び合うようになっていた。真平が、名前で呼んで構わない、と言ったので、明は名前で呼ぶことにしていた。

「俺、バドミントン部のつもりだから、真平もそうしようぜ？」

「あ、そう？じゃあバドミントン部にしよっかな。」

「あ、それなら、私バド部のマネージャーになるつもりだから、よろしくね。」

「そうなの？やったな、明！！超助かる～～。
けど、なんでマネージャーなの？試合とか出れないとつまんなくない？」

「私、運動苦手だから。でも帰宅部になるのも、もったいない気がして。」

まぁ明にとっては、理由がどうであれ、由美と同じ部ならばそれでいいのだ。

ふと、思い出したように明が言った。

「美咲、テストどうだった？」

「テスト？？？」

「今日の数学の時間やっただろ？あれのことさ。」

美咲が固まった……。

由美も真平も美咲の方を向いた。

そう、美咲は頭が悪い。それでもこの学校に入れたのは、多少の運があったからだろう。

由美も真平も、美咲は頭が悪いということを知らない。

……どうせ、今知るだろうけれど。

丸々5秒は固まっていたかと思うと、明を睨み付けながら言った。

「別に普通でしたよーだ！！」

「あ、そう？じゃあ？の（3）の答えは？」

「う……、わ、忘れた！！」

「じゃあ、（4）は？」

「そ、それも忘れた！！」

真平は、美咲の出来が悪かったことに気付いていて、にやにやしていた。ただ、美咲と真平は初対面なので、美咲をからかいはしない。

由美も、にやにやとまではいかないが、笑いを堪えているようだった。

明は続けた。

「じゃあ、できた問題言ってみ？」

「え、えーと……、（1）はできた……。」

「んで？他には？」

「ほ、他には……。」

美咲はもう顔が真っ赤だ。

「ぷっ、あはははは～～～！！！」

ついに耐えきれなくなったのか、真平が笑い声を上げた。

由美も、笑いながら言った。

「あはは～！！む、無理があるよ、松井さん」

「う、うるさい！！そんなに笑うなっ！っもう、明のバカっ！！」

美咲は赤い顔をしたまま、目を合わせないで一心にお弁当を食べ始めた。

昼休みが終わり、美咲は自分の席へ戻っていった。5時間目の授業は物理だ。まわりの生徒も、授業の準備をしている。

そうしているうちに、先生が入ってきて授業が始まった。もちろん、ガイダンスなのだが。

やはり、友達がいるのはいいものだ、と明は思った。授業中でも小声なら話せるし、退屈な授業でも我慢できる。

もっとも、隣の席に自分が好意を寄せている人がいるのも、同じくらい喜ばしいことではあった。

第9話（後書き）

小説って難しい……
小説家ってすごい……

できれば、感想などお願いしますm（＿＿）m

第１０話

放課後。

明は帰り支度をしていると、美咲が近寄ってきた。

「今日は、私、テニス部の見学していくから、先帰ってて～」

「あぁ」

「なんか言い方が淡白だね～。他に言うことないの？？“待っててあげるよ”とかさ～」

美咲が睨んできた。返事が不満なようだ。

「別に中学の時一緒に帰ってたわけじゃないだろ～？？それに、帰れって言ったの美咲じゃん」

「そうだけどさぁー……。もっと……こう、紳士的に」

「んなもん知るか。ほらほら、さっさと見学行った行った」

そう言って、手で追い払う仕草をすると、美咲は頬を膨らませた。

「いいよーだ！！今度明のお母さんに言っちゃうもん！！」

「それは卑怯だろ！！」

「何て言おっかな～♪」

「う……」

美咲はにやにやしている。勝ち目はなさそうだ。

「ほら、なんか言うことあるじゃないの、明君？」

「……テニス部の見学にいってらっしゃいませ。ここでお待ちしましょうか、美咲様？」

悔しそうに明が言うと、美咲の顔が勝利で笑顔になった。

「よろしいっ！！先に帰ってよし！！」

そう言って、美咲は荷物を持って、教室を後にした。

「はぁーー」

「明と松井さんって仲良いねー」

真平が話しかけてきた。前の席だから、一部始終聞いていたのだ。ただ、真平だけでなく、多くのクラスメートも二人のやり取りを見ていた。みんなまだ知り合いが少なく、教室は比較的静かなので、いやでも目についたのだろう。

「カップルみたいだよね」

由美も今の会話を聞いていて、真平と似たようなことを言った。

「ただの幼馴染みなんだけどなぁ、あいつは」

こう言ってみたものの、明は内心ではショックを受けていた。自分の好きな人に平然とそう言われたのだ。由美に間接的に、好意はない、と言われたようなものだ。

客観的に見れば、由美とはまだ知り合ったばかりだから当たり前ではあった。

気を取り直して、明は言った。

「真平ってどこ住んでるの？」

「俺？俺は大沢駅からバスに乗るんだ。ドアトゥドアで約３０分くらいかな」

大沢っていうのは、ここら辺で一番発展しているところであり、学校から４駅で着く。ただし、明や美咲の最寄り駅である久住公園や、由美の最寄り駅である東久住とは、逆方向にあたる。

ちなみに、学校の最寄り駅は、風華駅であり、学校の名前の“風華学園”と一致している。

「え～、お前、大沢なんかに住んでるの！？いいな～」

「別にいいことなんかねぇって」

「そんなことないだろ～。・・・まぁいいや。俺は逆方向だけど、駅までは一緒だし。帰ろうぜ」

「おぅ」

明は真平と帰ろうとしたが、横に立っていた由美に気付いた。
明は迷った。昨日、一緒に帰ったのだから、今日も一緒に帰っても不思議ではない。むしろ、ここで由美を無視して帰る方が不自然だ。だが、由美に話しかけるのは緊張するし、そもそも男二人と帰るのなんて、嫌がるのではないか。明はそう思っていた。

迷うこと約5秒。
真平に“どうした？”と声をかけられ、つい流れで口に出していた。

「白井さん、一緒に帰らない？」

由美は一瞬驚くような表情を見せたが、すぐに、うんっ！、と笑顔で答えた。

明はほっと胸を撫で下ろした。

第１０話（後書き）

寒いっ。

寒いっ。

外に出ると、必ず歯がガチガチなります。

春来ないかなぁ

第１１話

翌日。

そろそろ、クラスの雰囲気が徐々に打ち解けたものになってくる時期だ。

クラスメートの中には、既にグループを作っている人もいる。

授業内容も、さほど難しいわけではないので、あまり苦にならない。

１日の６時間の授業を終え、明は背伸びをした。

今日から、バドミントン部の仮入部期間が始まる。テニス部など、一部のクラブは昨日のうちから始まっていたが、ほとんどのクラブは今日からだ。

ここ、風華学園は、別段スポーツが盛んということはなく、かといって文化系のクラブがすごいわけでもない。良く言えば普通、悪く言えば平凡な学校なのだ。

ただ、風華学園は、設備が非常に良く、敷地面積も広い。綺麗な内装は、生徒よりも生徒の親達に受けが良い。

プールはもちろん、テニスコートは４面、体育館は大小１つずつ。柔道場や剣道場、工芸室や美術室。校庭は、サッカーと野球が同時

にできるくらい広い。
実験室だけでも、少なくとも４つあるし、図書館だって並みの学校の１．５倍はありそうだ。
そこまで恵まれた環境で、結果があまり出てないのが不思議なくらいだ。
ただ、その設備のおかげで、毎年の受験人数は少なくない。

明は自分のラケットバックを肩にかけ、真平に声をかけた。
「真平？早く行こーぜ？」
真平は、おぅ、と返事をすると、スクールバックのみを手にした。ラケットバックはない。なんといっても、真平はバドミントン未経験者なのだ。
真平がすぐに由美を誘ったので、３人でバドミントン部へ行こうとした。
教室を出て、数メートル歩くとおもむろに明が口に出した。
「ちなみに・・・どこに行けば良いの？？」
真平の口があんぐり。
「えっ…。もしかして……明……自分が入りたい部活の場所確認し

てなかったの……？」

「い、いや……つい。」

真平はやれやれ、とわざとらしくため息をつく。

・・・自分だって確認してないくせにぃー・・・

「でもまぁ、バドミントンなら体育館じゃないかな？」

由美がためらいがちに言った。

そりゃそうだ。大抵、バドミントンは体育館やるもんだ。俺としたことが・・

そこでふと、疑問が１つ。

「体育館って、どこ？」

「あぁーー！！どこだよっ、体育館！」

明は大声を出した。

教室を出て、かれこれ１５分はたっている。

普通、体育館なんて目立つし、何よりも入学式をそこで行ったのだ。

だから、３人は記憶を頼りにして探し続けた。

そのおかげか、実は教室を出て、5分くらいで体育館に着いていたのだ。しかし、中を覗いてみると、活動しているのはバスケ部とバレー部のみ。
三人は、体育館をぐるっと一回りしてみたが、バドミントン部がいる気配もせず。そこで、由美が勇敢にも、近くにいたバレー部の先輩にバドミントン部を尋ねたところ、

「バドミントン部？それならちっちゃい方でやってるわよ？ここは大きい方だから、放課後はバスケ部とバレー部が使ってるの」

だそうだ。
そうなのだ。ここは、体育館が大小1つずつあり、大きい方を“第一体育館”、小さい方を“第二体育館”と呼び、バドミントン部は第二体育館らしい。

そこで由美がその先輩に第二体育館への行き方を聞き、明と真平は由美についていった。

しかし。
なんと、後で分かったことなのだが、由美は昔から方向音痴だったらしい。それを知らずに明と真平は由美に任せっきりにしていた。

気付けば、三人は剣道場の前に立っていた。
唖然とする明と真平に、由美は自分が方向音痴であることを告げたのだった。

ということで、今度は明が剣道部の先輩に道を聞き、今まさに向かっているところだ。

探している間、三人はほとんど小走りで、今はもう全力疾走に近い。
三人が中庭に入ると、向こう側に体育館が見えた。なるほど、第一体育館に比べると小さく、どこかの市民ホールとかのようだ。

ようやく、三人はたどり着くと、扉の前で息を整えた。
中からは、シャトルを打つ小気味いい音が聞こえた。

「……ったく……はぁはぁ……どんだけ……はぁ…広いんだよ……」

真平が愚痴を言う。

まったくだ。ここの広さときたら、どこかのテーマパークみたいだ。
地図ぐらい貼り出せっつーの。

ここの広さが恨めしく思える明だった。

三人は、息も絶え絶えに、扉を開けた。

第１１話（後書き）

この間、帰りに自転車に乗っている変な人を見ました。
「横浜～～」とか「神奈川～～」などと、大声で叫びながら、車道の真ん中で転んでいました。
その人はとてもスピードが遅かったのですが、本人は死に物狂い。
僕も含め、周りの人達は、追い越すと絡まれて面倒くさそうだったので、彼の後をたらたらたらたら。
気付けば、蟻の行列のように、何十メートルも人が連なっていて、皆複雑な顔をしていました。笑

帰り道の途中にもかかわらず、思わず笑ってしまいました。

こんな話どーでもいいですね。はい。
ちなみに、これから1年間は、受験勉強のために、更新が遅れそうです。ご理解いただけると幸いです。

第12話

パァン！

先輩と思われる人達がシャトルを打ちながら、コートでウォーミングアップをしている。体育館の端に、何人かは座っている。

良かった。まだ始まってないようだ。

明達三人が、扉の前で戸惑っていると、二人の先輩と思われる人が近くにやってきた。

一人は男で、温和そうな顔つきをしている。頼りない、というより、優しいという言葉が合いそうな人だ。

もう一人は女で、体は細く、すらっとしていた。とても綺麗な顔で思わず見とれてしまうぐらいだが、どこかで見たことあるような気が、明はしていた。

「君たち、入部希望者？」

「はい。よろしくお願いしますっ！」

「え～と、じゃあまず、自己紹介をしておこうかな。俺は三年の、山崎一輝（やまざきかずき）だ。ちなみに男子の方の副部長ね。気軽に声をかけてくれて、全然構わないから」

そう言って、山崎先輩はにこりと笑った。

なんかもう、見るからに優しいオーラが出ていた。

今度は、女の先輩が話し始めた。

「私は三年の、桐島静香です。女子バド部の部長ね。一応、生徒会長もやってるんだけど……入学式で見たかな？よろしく。」

言い終わると、桐島先輩は微笑んだ。

……思い出した。

どこかで見たことあるってのは、入学式だったんだ……

横目でちらりと真平を見ると、桐島先輩に見とれていた。

二人に続いて自己紹介をしようと明が口を開くと、それを山崎先輩が遮った。

「あーー、まだ君達は自己紹介しなくていいよ。後で一年生まとめてしてもらうから。」

山崎先輩は、桐島先輩に目配せして、何か話すことある？、と目で聞いていた。

桐島先輩が小さく首を横にふると、山崎先輩は再び話し始めた。

「……え～と、じゃあ他の一年生のところに行こう。ついて来て」

山崎先輩は、くるりと背を向けて歩き出した。

「あ、あの！」

山崎先輩と桐島先輩が振り向く。

「何だい？」

「あ、あの…私……マネージャー希望なんですけど……」

由美がおずおずと喋り出した。

それを聞くや否や、二人の先輩の顔が、ぱあっと綻びた。

「うそっ！？良かった～～～。今年はマネージャー志望の子がいなくてね～。」

桐島先輩が由美に近づきながら言った。

笑顔の桐島先輩は素敵だった。

……戸惑う由美も可愛かったが。

「じゃあ、君だけこっちね！！」

桐島先輩はそう言って由美の手を掴むと、すぐに去って行った。

連れていかれたっていう表現が似合いそうだなと、明は心の中で苦笑いをした。

由美は終始戸惑う顔だったし。

山崎先輩も同じことを思ったのか、連れていかれる由美を見て呟いた。

「あらら～……。よほど嬉しいんだろうな、桐島のやつ。あの子、困ってたな……。まあいいや。それじゃ行こうか。」

山崎先輩は再び歩き出し、明と真平は、後ろをてくてくついていった。

「それじゃ、ここで待機してて」

山崎先輩はそう言うと、離れていった。

明と真平が連れられて来たのは、体育館の隅だった。周りには、他の一年生達がいて、座って待っているようだ。

明と真平も荷物を置いて、座って待つことにした。

明は、真平と談笑しながら体育館の様子を眺めた。

コートは全部で4面。まだ練習は始まっていないので、数人の先輩は思い思いに打っている。体育館の壁の近くで座りながら柔軟体操をしている先輩もいる。

今度は自分の周りの、同級生を見てみる。

男子は二人を含めて6人いたが、同じ2組の人はいない。真平のように、ラケットを持ってきてない人もいる。

女子は、男子より1人少なく、5人だった。だが、由美の姿はない。きっと、マネージャーは部員とは別の扱いなのだろう。

明達が体育館に来てから5分くらい過ぎた頃。

一人の男が体育館の中へと入ってきた。

その瞬間、体育館の空気が変わったような、気がした。

第１３話

体育館に入ってきた男は、どうやら先輩のようだ。制服を来ていることで、それが分かる。

ただ、いかんせん距離があるのでよく見えない。思わず、明は目を細めた。

その人は、更衣室に向かって歩き始めた。男子更衣室は入り口から見て右にある。

先ほど言葉を交わした山崎先輩が、あの人が入っていった更衣室に入っていく。

しばらくすると、二人とも更衣室から出てきて、一年生が集まっているところへと向かってきた。後ろから、桐島先輩ともう一人の女の先輩がついてくる。

四人の先輩が一年生の前に立つと、一年生は全員立ち上がった。

「俺が男子バドミントン部部長の、速水聡（はやみさとる）だ。よろしくな」

簡潔な自己紹介だったが、それだけで圧倒されたように感じた。

改めて、部長の顔を見てみる。

髪は黒で短く、精悍な顔をしていた。その顔には微笑みなど欠片もなく、厳格そうな印象を与える。

身長も１８０ｃｍはあるだろう。体つきは、筋骨隆々というより、

無駄な肉がない。

おそらくバドミントンも強いのだろう、と明は思った。

速水部長に続いて、山崎先輩と桐島先輩も自己紹介をした。ただ、先ほどと何ら変わりはなかった。

桐島先輩の自己紹介が終わると、もう一人の女の先輩が話し始めた。

「わ、私、品川紗耶（しながわさや）っていいます…。副部長です……。よ、よろしく……」

なんとも頼りなさそうな先輩だ……。

ただ、桐島先輩とは、なんだかいいコンビのように思えた。

四人が自己紹介を終えると、速水部長が再び話し始めた。

「とりあえずこれから、バドミントン部の簡単な説明を行う。俺らバド部は、男子と女子に分かれていて、練習内容も別だ。休憩時間や終わる時間も別。開始時間は一緒だけどな。見て分かる通り、コートは4面ある。入り口に近い2面が女子で、奥の2面が男子。着替えは部活が始まる前に、更衣室ですませとけ。あそこにドアが見えるだろ？」

そう言いながら、先ほど速水部長が入って行ったドアを指さした。

「あれが男子更衣室で、あっちが」

今度は反対側の壁にあるドアを指さした。

「女子更衣室だ。
それぞれの更衣室の横にあるのが、部室だ。……女子は知らんが、男子は用がなければ、あまり部室を使うなよ？」
そこまで言って、速水部長は息をついた。
「ここまでで、質問ある人？」
周りを見回したが、誰も手を挙げなかった。それを確認した後、速水部長は再び話し始めた。
「次は、練習内容について話す。
まず、開始時間は、授業が終わってからネット張りする時間も含めて、大体１５～２０分後だ。厳密な時間は決まってないからな。
終了時間は、大体１８時頃だ。というより、基本的に生徒は１８時には帰らなきゃいけないしな……。まぁたまに試合前とかは、遅くまで練習することもあるが。
練習自体は、そこまで辛くない。甘くもないけどな。ただ、怠けてサボったり、遊びでやるような奴はこの部にはいらない。入部するならそのつもりでいろ」
速水部長はぐるりと一年生を見回した。淡々とした口調だが、すごい威圧感を感じる。
なんというか……オーラ？？みたいな。
「多分、この中には未経験者もいるだろう。だから、はじめのうちはラケットを貸し出すが、基本的に自分用のを買えよ。今まで使っ

てたラケットがある人は、明日から持ってくるように。
とりあえず今日は、一年生は練習に入れるつもりはないから、見学してけ。好きな時間に帰っていいからな？
本当にバド部に入りたい人は、明日のこの時間、またここに来い。
その時初めて、自己紹介してもらうから」

速水部長は言い終わると、他の三人の方を見た。桐島先輩は首を横に振り、異論はないことを示した。

「じゃあ、以上だ」

そう言って、四人の先輩は戻っていった。

「どうする？」

真平が問いかけてくる。

「どうするも何も、とりあえず見ないことには始まらないだろ？まぁ俺は、もう入部するつもりだけど……」

「そうだな。少し見てから帰るか」

そう言って、二人は、練習の邪魔にならぬよう、体育館の端に座った。他の一年生も、大体同じだ。

しばらくすると、女子の部室の方から、由美が出てきた。一人の先

輩と一緒に出てきたが、由美だけがこっちに向かって来た。
「どうしたの？そんなところに座って……」
「あ、いや、今日は見学してけって言われたからさ……」
真平が説明する。
明は少し気になったことを、由美に聞いてみた。
「白井さん、今まで何してたの？」
「ん？ずっと先輩の話を聞いてただけだよ？」
「ずいぶん長かったような……？？」
「なんか今、マネージャーって一人しかいないらしいの。しかも三年生。だから多分、嬉しかったんじゃないかなぁ……」
「あぁ、さっき一緒に出てきた人が……？」
「そう。その三年のマネージャーの人だよ。なんか、マネージャーの心得？みたいなものを、話してくれたの」
三人が会話を止めてコートを見ると、すでに練習は始まっていた。

第１３話（後書き）

１３話にもなってまだ入学してから一週間もたってない（汗）

とりあえず始めは大事かなと思って、詳しく書いてます。入部するまでで第１章を終わらせようかと考えてます。

第１４話

帰り道。

明と真平と由美は、一時間ほど見学したあと、帰ることにしたのだ。中途半端な時刻なので、周りには帰っている生徒はほとんどいなかった。ただ、部活をしている生徒は多く、掛け声もよく聞こえた。

「なぁ明、結局、バドミントン部入るのか？」

「あぁ。入ろうと思ってるけど……」

「けど？」

「ちょっとキツそうだな……」

「ははは、同感…」

そうなのだ。今日の練習を見たが……かなりハードだった。もちろん、休憩時間はあるのだが、二年生の先輩のなかには、疲れて動けなくなってる人もいた。しかも、ラケットを使った練習とは別に、筋トレや走り込みといった、トレーニングもあったのだ。

ただ、俺、バドミントン以外のスポーツ、得意じゃないしな。

「で？真平は？」

「俺？俺も入るよー。なんていっても、あの桐島先輩がいるしな！」

まぁ確かに、桐島先輩は綺麗だったが……それを入部理由にするか？

明は呆れた目で真平を見つめると、真平は慌てて言った。

「じょ、冗談だって！！」

「し、白井さんは？」

明が言った。

「私も入るよ。まぁあんなに喜ばれちゃあ、断れないよ……」

由美が苦笑いをした。先ほどのことを思い出しているのだろう。

先輩達にとって、マネージャー志望の子なんて喉から手が出るほど欲しいのだろうな……

「そういえば、あのバド部って強いの？」

真平が言った。

「ん～～……。今日見た分だと、多分それなりに強いんじゃないかな……。」

明には、先輩達の打つスピードが、自分よりかなり速く感じた。ただ、受験勉強で半年近くラケットを握ってすらないし、今までは中学生の中でバドミントンをしていたのだ。速く感じてしまうのも、無理はないのかもしれない。

「あ、私、去年度の結果、大まかにだけど聞いたよ？」

由美が思い出したように言った。

「そうなの？で、どうだったって？」

「んーとねー、確か……男子も女子も、団体戦は県大会のいいところまで行ったらしいよ？」

「県大会かぁ……。全国には行けなかったんだ……」

がっかりしたように真平が呟いた。

「でもね、男子はえ～と、速水部長が全国大会行ったって！つまり…インターハイってことかな」

「「え　ぇ！？」」

「男子は、速水部長が頭一つ抜けてる……って聞いたよ？」

「……」

びっくりした……。やっぱり、感じたあのオーラは本物なのかな……。

「で、速水部長は何とか団体戦も全国に行けるように、練習を厳しくしてるんだって。

……どしたの二人とも？？？」

「いや、ちょっと驚いちゃって……」

その後、真平とは学校の最寄り駅の風華駅で別れた。方面が違うからだ。

最寄り駅に着くまでは、明は由美と二人っきりだったが、バドミントン部という共通の話題が出来たので、あまり緊張せずに済んだ。

その間にも明は、今までのバドミントン部の戦績、つまり試合の結果を聞いた。女子はなんと、桐島先輩よりも、品川先輩の方が強いとのこと。ただ、品川先輩には部長という役職は重すぎるだろう、ということから桐島先輩が部長になったのだとか。

男子は、実は速水部長のシングルスだけでなく、速水部長と副部長の山崎先輩のダブルスも全国大会に行ったらしい。

ただ、全国大会が視野に入るようになったのは速水部長が入部して

かららしく、それまでのバドミントン部は男女ともに弱小だった。

由美の話はそんなところだった。

バドミントン部でやっていく自信が少しなくなった明だった。

第１４話（後書き）

今回かなり更新が遅れちゃいました……
しかも、文章短い……

ダメですねぇ、僕

さて、次の１５話はおそらく第１章の最終話になると思います。

第１５話（前書き）

第1章最終話です

第１５話

「全員集合しろ！」

速水部長が声を張り上げた。

今日が部活初日。昨日速水部長に言われた通り、放課後に体育館に来て開始するのを待っていたところだ。

速水部長の声に従って、部員全員が速水部長の近くに走り寄った。それを見た一年生達も、同じ様に部長のもとへ急いだ。

「じゃあ、昨日話した通りに一年生には自己紹介をしてもらう。一年生、前へ」

一年生が戸惑いながら前に出た。明も倣って前に並ぶ。

「じゃあ、一番左のやつから自己紹介して。時間がないから簡単でいいからな」

一番左の人から自己紹介が始まった。さすがに高校生なので恥ずかしがる人はいなかった。

隣の真平が自己紹介を終えると、明は一歩前に出た。

「一年２組、近藤明です！バドミントンは中学の時から好きで、少しやってました。よろしくお願いします！」

自己紹介は5分もかからなかった。マネージャーの由美も自己紹介をした。その時、先輩達が嬉しそうに安心したように、笑顔になった気がしたが。

「これから練習を始めるから、男女分かれて」

山崎先輩の声に部員が従い、男子だけで集まった。男子だけで16人いた。

速水部長の周りに、ぐるりと半円を描くように並んだ。

「これから、練習の説明をする。一年生はよく聞けよ」

速水部長の説明によると、いつものような練習の前に一年生と先輩でラリーをするらしい。一年生の力量を軽く見ておきたいという部長の要望で。その後、普通の練習を始めるとのこと。

「分かったな？じゃあ二面あるから二人ずつ入れ。相手は……一輝、入れる？」

と、山崎先輩に問いかけた。

「はいよ」

山崎先輩は嫌な顔せずにコートに入る。

「じゃあもう一人は……太田（おおた）」

「はい」

「本気は出すなよ？」

「勿論です」

太田と呼ばれた人がコートに入る。速水部長への態度からおそらく二年生だろう、と明は思った。

……ていうか、あの態度で速水部長の同級生だったらビックリだ。

速水部長の指示通り、二人の一年生がコートに入った。

先輩が軽く球出しをしてからラリーが始まった。

山崎先輩と打っている一年生は確か、吉本（よしもと）という名前だった。先ほどの自己紹介を思い出しながら、明は名前と顔を一致させようと努力した。

吉本は山崎先輩に果敢に打っていく。多少慣れた動作で動いていたので多分経験者だ。ただかなりの確率で自分からミスをしていた。

もう一つのコートでは、大森（おおもり）という名前の一年生と太田先輩が打っていた。

大森は吉本と違って、慎重派だった。というよりはむしろ、攻めるのが苦手のようで守ってばかりいる。太田先輩は決して自分から攻めようとはしないのでラリーは長かった。

それにしても。

山崎先輩と太田先輩はスゴい。

今までミスしてラリーを途絶えさせているのは一年生で、二人は一

回もミスをしていない。
それどころか、わざと甘い球を出して一年生の力を測っているようだ。

かっこいいな・・・

そう思うと同時に、これから自分の力を測られることを考えて明は少し萎えた。

「やめっ！！」

始まってから、5分ちょっと。速水部長の声でラリーが中断した。
一年生二人はかなり汗を流しつらそうにしていたが、対照的に二人の先輩は涼しい顔をしていた。

「交代。次の二人入って」

明は山崎先輩の方のコートに入った。
太田先輩の方に入るのは、野崎（のざき）という一年生だ。どうやら初心者らしく、ラケットを適当に振っていた。

……それにしても、緊張する～～～っ
周りの先輩、全員に見られるんだよな……

明は山崎先輩に向き直り、自分のラケットを握り直した。

山崎先輩が軽く、シャトルを打った。
シャトルが高く上がり、ネットを越え、上から近付いてきて。
明はラケットを構え……

パァン！！！

ハイクリアで返す。

・・・気持ちいいっ！！

久々にシャトルを打つ明は、自分の気持ちが高揚するのを感じた。

山崎先輩もハイクリアで返してきた。
しばらくハイクリアでラリーが続くと、山崎先輩は急に前に落としてきた。ただ、ドロップほどの鋭さはなく明がちゃんと取れるように打っていた。

明はまた高く上げて、ハイクリアのラリーに戻す。時々、明がスマッシュを打てるようにチャンスボールを出してくれたが、敢えて明は攻めないようにしていた。

山崎先輩がまた短く打つ。ただ、先程とは違って比較的落ちるのが早い。明が攻めないことに焦れたのかもしれない。

明はギリギリでシャトルを返すと、そのままヘアピンでの打ち合いになった。
しかし、ネット際の打ち合いなんてそう長く続くものじゃない。
明の甘くなった球を山崎先輩が手加減したプッシュで決めた。

明がシャトルを拾い再びラリーを始めようとすると、山崎先輩が手招きした。

「え～とっ、名前……近藤……だっけ……？？」

「あ、はい。近藤です」

「もう少し攻めてごらん？」

「……はい…」

「僕の方が強くて当たり前なんだから、返されることを怖がらないで。練習なんだから思い切りやってみ」

「……はいっ」

図星だった。
自分が本気出して攻めても山崎先輩が全部返してきたらと思うと、自分の力がはっきりしそうで怖かった。

それに何より、由美が見ているかもしれなかった。好きな人の前でボロボロにはなりたくなかった。

だけどっ！！！！

攻めてこいと言われたのだ！
ならば攻めようじゃないか！
明はラケットを強く握って、球出しをした。

「やめっ！」
再び速水部長の声がかかり、明と野崎の番が終わった。
一体どれだけこの一言を待ち望んでいただろうか。
あの後、山崎先輩に指摘を受けた明は果敢に休むことなく攻めたが、
山崎先輩はその全てを返球していた。

明はへろへろになりながらコートから出た。
もう、周りの眼など気にしてられない。
疲れて他に何もしたくないのだ。
ただ、流石に座りこむわけにもいかず、体を折って膝に手をあてて、
肩で息をする。

次の一年生二人が、速水部長の指示でコートに入った。一人は真平で、先輩からラケットを借りている。

「……一輝、まだできるよな？」

と、部長は山崎先輩に問いかけた。

「うん。勿論」

「まぁそりゃそうか。……太田は？交代が必要か？」

「まだ大丈夫です」

「……わかった」

そうして、最後の二人が始まった。

真平は山崎先輩と打っていた。しかし、初心者なのでフォームさえ固まっていない。

驚きだったのが、もう一人の一年生だった。

なんと！

めちゃくちゃ上手い！

流れるように打っていて、打ち方がものすごい綺麗。あの太田先輩と互角に打ち合っている。

普通の人が苦手とするコースも無難に返していく。
まるで踊っているような綺麗さだ、と明は思った。
その一年生の名前は、佐伯孝介（さえきこうすけ）だった。
明は佐伯と太田先輩のラリーについつい見とれてしまった。

「やめっ！」
部長の声が響く。
これにて、一年生の力試しは終了した。
太田先輩と佐伯を見ると、二人とも汗だらだらだった。
……まあ真平も、疲れはてていたが……
速水部長が佐伯に近付いた。
「たしか、佐伯……だったよな？」
「はい、佐伯です。」
「バドミントン経験者だよな？」

「はい。中学から。」

「クラブチームか？」

「いえ。部活でした。」

二人の会話を全員が聞いていた。
再び速水部長が尋ねた。

「お前……中学の時の大会の結果、言ってみろ」

「全中（ぜんちゅう）の本選2回戦敗退です」

周りの先輩たちがざわめいた。
そりゃそうだ。全中とは、中学生の全国大会のことなのだから。

「……そうか。しかし俺はお前を特別扱いするつもりはない。それは忘れるな」

「はい」

「……よし、これから練習を始めるっ！全員集まれ！！」

帰り道。

明たちは駅へと向かっていた。

あのあと、みっちりと先輩達にシゴかれて疲れていた。筋トレやダッシュも一年生は先輩と同じ量をこなしたのだ。

ちなみに明たちというのはバド部の一年生男子のことだ。これから2年以上付き合っていくから、まあ仲良くしようじゃないか、という真平の意見だ。

というわけで、6人全員で帰っているのだ。

「なあなあ、佐伯ってほんとに中学から始めたの？」

一人がさも不思議そうに聞いた。それは明も気になっていた。

「ん？そうだけど？」

「うわぁー。なんであんな上手いんだよ？」

「えー……俺が知るかよ」

話してみて分かったのだが、佐伯はどうやら口数が少ない。まあよく言えばクール、悪く言えば取っつきにくいって感じだ。

佐伯は、男の明から見てもかなりカッコイイ。茶色がかったショートの髪に彫りが深い顔立ち。背も１７５？はあるだろうか。

ちょっと悔しい……

「近藤も前からやってたんだろ？」
初心者の野崎が聞いてきた。
「まぁ、やってたと言えばやってたけど……遊びみたいなもんだったかなぁ……？」
「えー結構上手いのにー。もったいないなー」
大森が明の方を見ながら言う。
「嘘だろ～、俺たいして上手くないよー？それに、俺は楽しくバドミントンができればそれでいいの！」
そう、美咲にも言ったが、明はバドミントンをすること自体に満足していた。
だから、あまり向上心が湧かないのも事実だった。

みんなで話していると、いろんな事が分かってきた。
やはり吉本と大森は経験者で、野崎は初心者だということ。
クラスも聞いたが、明と真平のクラスの人はいなかった。

そんなこんなで、いつの間にか最寄り駅に着いたので、明は「じゃ

あね」と言って別れた。

ちょうどサラリーマンや学生が多い時間帯なので、改札を抜けるのに並ばなくてはいけない。

明が改札を抜け駐輪場へ足を向けると、前にテニスバッグを持った見慣れた姿を見つけた。

「美咲っ」

多分美咲も同じ電車に乗っていたのだろう。

明が声をかけると美咲は驚いて振り向いたが、明だとわかるとすぐに笑顔になった。

「なんだー、明じゃ～ん！今帰り？同じ電車だったっぽいねー」

「お前、そんなデカイ荷物しょっててて重くないの？」

明が美咲のテニスバッグを指差すと、美咲が呆れたような顔をした。

「あのね……テニス部員がテニスバッグ持ってなくてどうするのよ……。あんたのバドのラケットだって、普通の人からしてみれば十分邪魔に見えるんじゃない？」

そんなもんかぁ、と明は納得した。ただバドミントンのラケットは軽いので、邪魔に感じたことは一度もない。

「それとも何？“バッグ重そうだから代わりに持ってあげるよ？”って？」

「アホか」

「アホじゃないし！！」

明と美咲はそれぞれの自転車を駐輪場から出した。

「ねぇ明？送って？」

「何でよ」

「何でって……ほら、もう夜じゃん？暗い夜道に女の子一人じゃ危ないな～ってことでっ！」

明は露骨に嫌そうな顔をしたが、

「しょーがないなー」

と言った。

「えっ！？今何て言った！？」

「は？しょーがないって……言ったけど……」

「何で！？」

「何が？」

「何で明、今日はそんな優しいの！？」

「……帰ろ」

「わぁーー！嘘嘘！明はいつも優しいもんねー！」

美咲がそう言った後、明と美咲は顔を見合わせ、自然にくすくす笑い合った。

そう。

そんな空気はまったりしてて。

心の中いつになく穏やかで。

こんな日々が続けばいいな、なんて漠然と思った。

第１５話（後書き）

これにて、とりあえず第1章は終わりです！

いやー恋愛小説としては全然動きがないですね……猛省。。

第2章からは、ちょくちょく視点を変えて書くつもりです。

こんな拙い文章を読んでくださる人に本当に感謝です！これからも、どうぞよろしくお願いします。

第2章　第1話

「――――であるから、ここのxにはこれを代入して――――」

3時間目の数学の授業。

前の教壇では、クラスの担任の有川先生が問題の解説をしている。

松井美咲はつまんなそうにはぁー、と溜め息をついた。

「どうした～？？授業中に溜め息とは感心しないぞ～？」

後ろの席の、宮代絵里（みやしろえり）がそう囁いてきた。

彼女はこの学校に入ってから初めて出来た友達だ。

顔は可愛い方なのだが、化粧をほとんどしてない。化粧すれば男子は放っておかないだろう、と美咲は思っている。

髪は1つに結わえており、活発な印象を抱かせる。

「だって授業なんてつまんない～～」

「えっ！？美咲ちゃんってそんなに頭良いのー！？いいなぁ～」

「い、いや……そういうわけじゃなくて……やばっ！」

美咲が宮代絵里と話していると、有川先生と目があったので慌てて前に向き直った。

彼女にはああ言ったが、美咲の溜め息の理由は授業のせいではない。

近藤明のことだ。

明はこのところずっと部活に出ていて、あまり会話できてない。行き帰りで一緒になることもほとんどない。

それに……

明が白井由美とどんどん仲良くなっていく。

見た感じだと由美は明に対して何も感じてないようだけど……なんか面白くない……。

そう思って美咲は再び溜め息をついた。

3時間目と4時間目の授業が終わって昼休みになった。

「やったー！やっとお昼だー」

宮代絵里がそう言いながら、机に頭をのせてだら～としている。

「じゃあお弁当食べよっ」

美咲がそう言うと、絵里は何に気付いたように、あっと声をあげた。

「今日お弁当持ってきてないんだった！」

「あ、そう？じゃあ食堂で食べよ？」

「うんっ」

そう言って二人は立ち上がり教室を出ようとしたが、美咲が絵里を引き止めた。

「あ、由美誘ってもいい？」

「由美……？」

「白井さんのことだよ！同じ塾だったんだよ！」

「そうなの？じゃあ一緒に行こっ？」

美咲は後ろの方の席の由美に手を振った。

「おーい由美ー。お昼食堂で一緒に食べよー？」

大声でそう訊くと、由美は笑顔でうなずいてお弁当を持ってきた。

美咲は由美が近くに来ると三人で食堂に向かった。

ここの学校の食堂は一階にあり、かなりのスペースがある。百人以上座れるようになっている。
四人席もあれば長テーブルもある。
しかも、ちゃんとした料理（カレーとかラーメン）に加えて、パンやアイスなどの既製品も買うことができる。要は種類が豊富なのだ。
ドラマによく見るような熾烈な争奪戦とかもなく、みんな思い思いに好きなものを買っている。中には美咲のように、お弁当を食堂に持ってきて食べている人もいた。

「じゃー私買ってくるから、どっか座っといてー」
そう言って絵里は売り場へ向かった。
美咲と由美は空いている長テーブルに向かい合わせで座った。
「ところで由美さー、マネージャーどう？大変？」
お弁当の蓋をあけながら美咲が言った。
「んー……そうでもない、かな。まだ忙しい時期じゃないらしくて、それに先輩のマネージャーもいるし」
「でもさー、なんかじっとしてるのっていやじゃない？」
「それは美咲ちゃんだからでしょ……」

そう言って苦笑する由美。

「……まぁたまに休憩時間に遊びで相手してもらうくらいかな……。そういう美咲ちゃんは？テニス部どう？」

「問題なし！周りの先輩とかもみーんな優しいし！」

「へぇー」

ふと美咲が売り場で並んでいる絵里を見ようと顔を上げると、こちらに近づいてくる明と北川真平の姿が見えた。

「お、美咲じゃん。あと白井さんも。」

そう言って明は美咲の隣に座った。手には食堂のうどんがあった。同時に、真平が由美の隣にお弁当を置きながら座った。

「あれ？明、お弁当じゃないの？」

「ん？あぁ。母さんが寝坊しちまって。美咲と白井さんは？二人とも弁当みたいだけど……」

「私たちは絵里がお弁当忘れたって言うから……」

「「絵里？」」

と、明と真平が聞き返すと、美咲は説明した。

「ほら、教室で私の後ろの。今向かってきてる子」

美咲が指さした方向には、トレーを両手で持ちながら歩いてくる絵里がいた。

絵里は、美咲達に気付くと声をあげた。

「……あら？……人数増えてる……？？」

第2話

「へぇー、幼馴染みねぇ～」

食堂のカレーライスを口に運びながら絵里が言った。

「そ。小学校低学年の頃からのね」

美咲が絵里に説明していた。

「ふーん……。で、白井さんに、近藤君で、……えーと？」

絵里が由美と明を順に指さし、最後に真平を指さした。

「俺？俺は北川真平。まぁこの三人とはこの学校で初めて知り合ったけど……」

そう説明する真平。さらに続けた。

「あ、ちなみに俺と明はバドミントン部だから。で、白井さんはそのマネージャー」

「えー、白井さんマネージャーなの！？大変じゃなーい？？」

由美が微笑んだ。

「美咲ちゃんと同じこと言ってる。でも、一人じゃないし、それに私運動は苦手だから……」

「ふーん……」

「宮代さんは？何部？」

真平が絵里にそう訊くと、絵里は肩をすくめた。

「まだ決めてなーい。どっかしら入ると思うけど…」

「絵里ったらー、私がテニス部にしようって誘っても来てくれないんだよー」

美咲が不満そうに言うと、他の四人は呆れたような顔をした。

「べ、別に部活くらい自由に選ばせてあげれば……」

「まぁそうだけど……」

「お前は部活じゃなくて勉強しろ。勉強。」

「う、うるさい」

「宮代さん知ってる？こいつ、こないだの数学のテスト———」

「わぁーー！！言わないでー！！」

明が絵里に美咲の点数を暴露しようとすると、美咲が慌てて大声を出して明の口を抑えた。

「え？何々？気になる～」

絵里が好奇に満ちた視線を明に送りながら、身をのり出した。真平と由美はもはや笑いをこらえている。

「絵里は知らなくていーの！」

明を叩きながらそう言うと、美咲は一心にお弁当を食べ始めた。

明たち5人が食堂で食べていると、向こうから桐島先輩と品川先輩がやってきた。その2人は由美の姿を見つけると近くに座った。

「や、由美ちゃん」

「こんにちは。桐島先輩と品川先輩も昼食ですか？」

「うん、これから」

桐島先輩と由美が会話しているのを、他の4人は緊張しながら聞いていた。なんと言っても桐島先輩は現役の生徒会長なのだ。

急に口数が減った4人を見て桐島先輩は不思議そうに言った。

「……あれ？あ、私のことなんか気にしないで。どうぞ食事を続けて」

しかし、緊張している明たちはろくに返事ができず、軽く頷くだけであった。そんな４人を見て品川先輩がフォローを入れる。

「……あのね、静香？自分が生徒会長だってことわかってる？」

静香というのは桐島先輩の名前だ。

品川先輩の言葉を聞いて、桐島先輩は言い返した。

「でもさ～生徒会長っていっても生徒には変わりないじゃん？」

「生徒会長って別格じゃない？」

「え～、私、特別扱いされたくはないんだけどー」

そう言って桐島先輩は明たちに向き直った。

「そういえば、初対面の人がいるね……。由美ちゃんはいいとして、そこの二人もバドミントン部だよね？……えーっと……北川君に近藤君……で合ってる？」

桐島先輩がそう訊いてきたので、明と真平は、はい、とだけ答えた。次に桐島先輩は、美咲と絵里の方へ目を向けた。

「……それで、君たちは初めましてだよね？」

「あっ、はい、そうです。松井美咲っていいます」

「あっ、私は宮代絵里です」

慌てて自己紹介した二人に桐島先輩は軽く微笑んだ。

「そんなに硬くならなくていいってば～。私は桐島静香。一応生徒会長やってまーす」

笑顔でそう言う先輩に、明たちは徐々に緊張がほぐれていくのを感じた。

そのあと、昼休みが終わるまで美咲たちは桐島先輩たちと話していた。桐島先輩はとても話が上手くてみんなを楽しませた。昼休みが終わる頃には、美咲は桐島先輩への緊張も薄れ、このまま話していたい、とまで思うようになっていた。

……桐島先輩ってすごいなぁ。

話は面白いし、あんなに綺麗で、それでいて性格もいい。

おまけに生徒会長かつバドミントン部の部長。

あんな人になれたらいいな……

ばいばい、と言って教室へ戻っていく桐島先輩の後ろ姿を見ながら、
美咲はいつの間にか憧れを抱いていた。

第3話

キュッキュッ

パン！パパン！

「遅いぞ！ダッシュ！」

「ナイスショット！」

放課後の体育館、バドミントン部の練習。先輩達の声が時たま飛び交い、部員全員が必死に動いているので体育館には熱気が充満していた。

そんな中で明も練習していた。

入部してから日数は経ったものの、バドミントン部のハードさには相変わらず付いていけない。ただ、受験勉強のためになまっていた自分の体に、体力が少しずつ戻ってきたのを感じていた。

「おい近藤！休んでないでこっちのコート入れ」

コートの脇で汗を拭いていると、3年生の先輩から言われた。明は、はい、と返事すると、言われた通りにコートに入った。

全く、休む暇さえないな……

そのコートで相手をしてくれたのは山崎先輩だった。

山崎先輩は非常に優しくて後輩を怒ったりしない。面倒見も良く、ちょくちょく速水部長のブレーキ役にもなっている。そのため後輩からの人望は厚く、頼れる先輩ってとこだ。

一方速水部長はと言うと、厳しくて厳格で妥協を許さない人だった。まさに明が感じた第一印象そのものだった。しかし、だからといって後輩から嫌われることはなく、むしろ男らしくて慕われておりみんなの尊敬を集めている。

明が山崎先輩と打っていると、時計を見た速水部長が練習を一旦中断させて休憩にすることを大声で告げた。

ああ、やっと休める……と明はへとへとになりながらスポーツドリンクを取りに行くと、山崎先輩が明の名前を呼びながら手招きをした。休みたかったが仕方ない。明は山崎先輩の方へ向かった。

「ちょっと打ってる時に気になることが……って大丈夫？辛そうだけど」

汗びっしょりで息が荒い明を見て心配するように言ってきた。

「……い、いや……ふぅ……大丈夫です…」

「そ、そうか……？じゃ、向こうで座るか」

山崎先輩はそう言うと、体育館の端に行って座り、明に隣に座るよう促した。

バドミントン部では基本的に上下関係が厳しかった。先輩と話す時は勿論敬語、返事は「はい」と大声、後輩は部活の準備、などなど。そのような部の規則の中には、“先輩の話は立って姿勢を良くして聞く”というものがあったので、山崎先輩の提案は疲れている明にとってありがたいものだった。

「まあアドバイスってことで少し言いたいんだけど、まず第一に攻めるのが遅いかな。スマッシュのスピードとかは別に遅くないんだけど攻めるタイミングがね……。多分、自分でも気がついてるでしょ？」

「はい。その通りです。中学の時からそうでした…」

明は認めざるを得なかった。それよりも、数分打っただけで自分の癖を見抜かれたことに驚いていた。

「ほら、あいつ、品川を見てごらん？」

そう言って山崎先輩は女子の方を指さした。女子はまだ休憩に入っておらず練習を続けていた。明が山崎先輩に言われた通りに顔を向けると、品川先輩が打っているところだった。

「品川は女子バド部の中でも一番攻めが強くてね」

品川先輩のプレーを見ていると山崎先輩の言葉がよく分かる。品川先輩は強気に攻め立てていた。

普段の態度とは似ても似つかないんだけどな、と山崎先輩は笑みを洩らした。

「……ま、それはいいとして、ちょっと見ててみな。……ほら、今あいつはそこまで浮いてない球をプッシュしただろ？」

確かに品川先輩は、ネットギリギリとまではいかないが、明だったら見送ってしまうような球を攻めていた。

「今のは近藤だったら上げてるだろ？……つまりは、お前は前に詰めるのがちょっと遅いってこった」

「…分かりました」

「まあプレースタイルってのは性格が出るからな。ぼちぼちでいい、ぼちぼちで」

そう言って山崎先輩は自分のスポーツドリンクを一口飲んだ。明も飲もうとしたが、すでに無くなっているのに気付いた。

「あと、もう一つ言いたいことがあってな……分かるか？」

山崎先輩がそう訊いてきた。明はしばらく考えたが、思いつかなくて首を横に振った。

「お前は諦めが早いんだ。なんていうか……勝ちに執着してない、とでも言うのかな……。

まあ確かに、今は練習で試合じゃないから本気になれないかもしれないけどな」

そう言って山崎先輩は明をちらりと見た後、視線を速水部長の方へ向けた。

「あいつ…速水が自分に言い聞かせている事、知ってる？『バドミントンに私情を持ち込むな。いつでも同じプレーをしろ』だってさ。たとえいくら疲れていようと、だからといって諦めちゃ、ダメだよ？分かった？」

山崎先輩は笑顔だったが目は真剣だった。明は、はい、と答えることしかできなかった。

「そういえば、近藤って北川と白井と一緒に入部したんだよな？」

アドバイスの後しばらく談笑していると、山崎先輩がふと思い出したように言った。

「そうです。今クラスが同じなんです」

「中学からの知り合い？」

「いえ、この学校に入学してからです」

「そう？　それにしちゃ、仲良くないか？」

「あー…まあ、席が近いからですかね…？　真平が前の席で白井さんが隣なんです」

「真平？」

「あ、北川のことです」

「ふーん……。じゃ、二人とも友達ってところか？」

そう訊いてきた山崎先輩の顔には、心なしか明には悪戯っ子の表情が見えた気がした。

「まあ、そうですね、友達です」

「ふーん」

そう言って前を向いた山崎先輩はにやにやしていた。

明は確信した。

この人、何か企んでる。

明の予感は正しかった。なぜなら、次の瞬間には山崎先輩が明に目を合わせて、こう言ってきたのだ。

小悪魔のような笑みを浮かべて。

「友達じゃなくて、好きな人の間違いじゃないのか？」

「！！」

「それとも、意中の人、とでも言った方がいいか？」

「！！！！」

明は絶句した。唖然とした。

明は今までの会話で、それらしきことを言ったかどうか記憶を手繰った。いいや、言ってない。

じゃあ、誰かから聞いたのか？　いや、白井さんが好きだということを間違っても誰かに言う訳がない。

言葉を失っている明を見て、山崎先輩は笑い声をあげた。

「おっ、その顔は当たりか！　お前わかりやすいなー」

どうやらかまをかけられただけらしい。ものの見事にかかってしまったが。

明は我に返って慌てて否定した。

「べっ、別にそんなんじゃ……」

「いいって～。もう隠すなよ～」

「違いますって！」

明は必死に否定したが、山崎先輩はにやにやして、「うんうん、そーかそーか」などと言っている。

明は恥ずかしさで顔から火が出そうだった。

「とにかく、違いますからねっ！！」

「あっそう？　往生際悪いなー。それじゃ……」

そう言って山崎先輩はさらににやりとする。もはや、悪い予感しかしない。

山崎先輩は両手をメガホンのように口にあて、大声を出した。

「おーい！！　白井さーん！！」

「えっ！！　あっ、ちょっと！！」

山崎先輩は由美を呼んで、手招きをした。

「何してるんですか！？」

「何って……別に、嘘なら言っても問題ないよね？」

ふふん、と笑う山崎先輩。

「ちょ、ダメですって！！」

明があたふたしているうちに、いつの間にか由美が二人の前に立っていた。

「何ですか？」

「ん、いや、近藤がね……」

明は顔を真っ赤にして、黙ったまま俯いた。

……まさか、こんな形でカミングアウトされるなんて。山崎先輩、一生恨んでやる……

そんな明を脇目に見つつ、山崎先輩は続けた。

「近藤がね、スポーツドリンクなくなったから欲しいって」

おもむろに明のペットボトルを掴むと、由美へ向かって優しく投げた。

由美は、「分かりました」と言って、小走りに離れていった。

明は現状把握するのに数秒要した。

……要は騙されたのか……

明が山崎先輩を見ると、勝ち誇った顔をしていた。

「何か言いたいこと、ある？」

そして、明は一言だけ絞り出すように言った。

「参りました」

第3話（後書き）

ユーザーネーム変わりまして、“夏月”になりました。

投稿遅れちゃいました。

今年は忙しいので更新速度は上がりそうにないです。

ただ途中で投げ出すつもりはありませんので、こんな駄文でもよろしくお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5568h/

Happy life!!

2011年5月26日17時41分発行